



アッシジの聖フランチェスコ

今こそ、フランチェスコ

竹下節子

読響は今年、創立55周年の一大プロジェクトとして、メシアン(1908~92)唯一の歌劇『アッシジの聖フランチェスコ』に、常任指揮者カンブルランと挑みます(演奏会形式・全曲日本初演)。本公演に向けて、本誌ではメシアンに関する特集を「アッシジへの道」として連載してきました。最終回は、フランシスコ会の創設者として知られるカトリック修道士フランチェスコの人物像や思想とその現代性について紹介します。(編集部)

エコロジーの守護聖人 フランチェスコ

『ブラザー・サン シスター・ムーン』の映画でも有名な「太陽の賛歌」は、聖痕を受けたフランチェスコが、1224年に作詩して説教の助けに歌うようにと兄弟たちに勧めたものだ。それを神学にしたのが、スコラ神学でのアリストテレス受容を批判したイタリアの神学者ボナヴェントゥラだった。1979年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世はフランチェスコのことを「神から人間へのすばらしい贈り物である自然を崇敬する人の模範」だと称え、神の創っ

た万物を守るエコロジーの守護聖人だと宣言した。

2013年に選出された今のローマ教皇は、2000年の歴史の中で初めてフランシスコという名を選択した。フランシスコ会士ではなくイエズス会士だったので、フランシスコ・ザビエルにちなんだと思われたが、アッシジのフランチェスコを敬愛してのことだった。

フランチェスコという名は「フランス」に由来する。生まれた時に父親がフランスに仕事に行っていたのを記念して、フランス人という意味のフランチェスコと名付けられた。北イタリアはフランスとの交流が盛んだっただ

人気の名だったという(「フランス」はフランク族に由来する言葉で、フランクとかフリーの語源でもあるラテン語の自由人“Francus”という含意もこめられる)。フランスでは逆に、ローマに巡礼した人がロマンとかロメヌとかいう名を付けていたが、フランソワという名は少なかった。アッシジのフランチェスコが1228年に死後2年で聖人となり、フランチェスコ修道会が大躍進した後でフランソワやフランソワーズという名が増えたのだ。スタンダードな名となったのは、歴代のフランス王で最も有名な一人であり、レオナルド・ダ・ヴィンチのパトロンとなったことでも有名な16世紀のフランソワ1世の後だ。

フランチェスコと イエス・キリスト

けれども、アッシジのフランチェスコは当時のローマ教会の富貴や権勢とは対照的に私有財産を拒否し、福音にしたがって生きた人だ。王侯貴族とは程遠い。現教皇がこの名を選んだのは、エコロジーへの使命感と、冷戦後の新自由主義経済で拝金主義^{まんえん}が蔓延する世界への挑戦でもある。実際に、地球の環境保全を訴える回勅^{かいちよく}を出し、バチカンの不透明な財政の改革にも着手して清貧を実践している。バイオテ

クノロジー、核、情報技術は、それを支配する者に過大な権力を与える危険なものであるとする警告は、政治的経済的な価値観にまで踏み込んだものだ。

フランチェスコは、すべてのキリスト教修道会創設者のうち最大のインパクトを持つ人で、その霊性だけではなく人柄までもが神学的思考の対象になった。フランシスコ会の始まりとキリスト教の始まりはパラレルに語られることがある。ナザレのイエスは、神殿の祭司を中心に律法厳守の形式的な生活規範と化していたユダヤ教システムから距離をおき、「共同体」から排除されている人々(サマリア人、徴税人、娼婦など)と寄り添う自由と平等に、神の国の本質を見た。フランチェスコも、教会の聖職者を中心に教義と典礼重視のカトリック教会のシステムから外に出て、人の共同体ですらない獣や



ローマ教皇に謁見するフランチェスコ

鳥に語りかけ、自然を兄弟姉妹だと呼んだ。初期のキリスト教徒たちが迫害されたように、初期のフランシスコ会士のうちシステムに組み入れられるのを拒否した人々も異端視された。

ユダヤ社会の外延で博愛を説いたイエスに賛同する人がキリスト教の母体になったように、権力機構となっていたカトリック教会の外で鳥や獣や自然の万物との連帯を実践したフランチェスコによって、キリスト教のエッセンスが刷新されたのだ。

21世紀の希望を祈る

フランチェスコのエコロジーは一神教の位相にルーツを持つ。古来、ギリシャ・ローマの古代世界でも、オリエン^{りやう}ト世界でも、「自然」は人間を凌駕するものだった。人々は自然現象や動植物を神や神の使いに見立て、多様な神々の間に主従関係を想定したり、その怒りを鎮め、恵みを得るために供物^{いけにえ}や生贄を捧げたりした。

ところが、ユダヤ世界に生まれた一神教の神は人間と自然との関係をラディカルに変えた。人間と自然の両方を超越した神が、宇宙の万物を創造したと考えたからだ。その世界では、人間は自然に翻弄^{ほんろう}される犠牲者でもなく、自然の崇拝者でもなく、自然を支配す

る搾取者でもない。自然も人間も同じ創造神を父とする兄弟姉妹だ。太陽は兄弟、月は姉妹というフランチェスコの賛歌はそこからくる。すべての自然は、目に見えない父である超越神の愛を反映している。

これは確かに多神教的な文化とは別の世界観だけれど、仏教にも山川草木^{さんせんそうもく いっさいしゆじょう}、一切衆生すべてに仏性が宿するという考え方がある。環境との関係の中で存在する一切のものをつなぐ命や光を感知するのは、古今東西普遍的な感性なのだろう。自然は人間の独占物ではない。

けれども21世紀の今、人間が環境を破壊するという一般論だけではなく、自然資源は一部の強者の独占物になりつつある。利権が紛争の種となって人間同士の殺し合いにまで進むのだ。環境保護の問題意識は道徳と倫理と切り離せない。「太陽の賛歌」の後半は、ゆるし合いと平和を歌うものだ。兄弟姉妹がゆるし合い、平和共存するところにはじめて神の姿が見えてくる。

神を賛美して歌うすべての被造物には、それぞれのパート譜がある。ひとりひとりの人間も、持って生まれた声と音域とメロディで宇宙と共鳴できるのだ。21世紀は、フランチェスコの祈りを必要としている。

(たけした せつこ・比較文化、宗教思想史)

矢代秋雄夫人が語る メシアン



山中湖畔で鳥の声を採譜するメシアン(左)と矢代秋雄(1962年6月)

メシアンが初めて日本を訪れたのは1962年初夏で、〈トゥーランガリラ交響曲〉の日本初演に立ち会うためだった。滞在中、「日本の鳥の声をぜひ聴きたい」という作曲家の願いをかなえるため、富士山麓、山中湖畔の森を案内したのは、戦後を代表する作曲家の一人、矢代秋雄(1929～76)だった。

パリ留学時代にメシアンの講義を受講し、「1冊だけスコアを持って逃げろと言われたら、〈トゥーランガリラ交響曲〉を持っていくと言うくらい、主人はメシアンの音楽に心酔していました」。夫人の矢代若葉さんは当時をこう振り返る。

一行は前日に御殿場に1泊し、翌早朝に山中湖へ向かった。夫人の手元には、スケッチ帳に鳥の声を採譜するメシアンと、師の大きなカバンを持って肩越しにのぞきこむ矢代秋雄を写した1枚がある。「ほかに、メシアンに同行した夫人でピアニストのイヴォンヌ・ロリオさんが途中で足をくじいてしまい、茂みの中で座り込んで足をさすっているスナッ

プもあります」

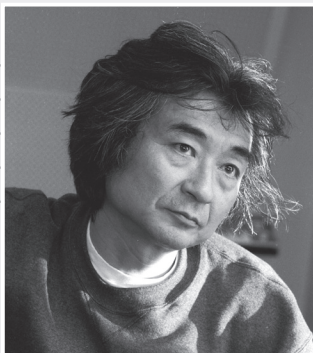
山中湖での採譜は、帰国後に発表された作品〈七つの俳諧〉の第3曲“Yamanaka cadenza (山中湖－カデンツァ)”として陽の目を見た。「ピアノと管弦楽のための日本の素描」と副題の付けられたこの曲について、若葉さんは「楽譜には、ミソサザイはシロフォン、アカハラはイングリッシュ・ホルンで表され、アオジとオオルリは須走^{すばしり}(富士山東側の登山口)で採譜した、と記されているんですよ」と懐かしそうに語る。

メシアンは鳥の採譜の天才だった。この時の来日では、東京で開かれた講演会で「鳥の歌の記譜法」と題して講演も行っている。55年前の富士山麓の小鳥たちの軽やかなさえずりは、天才の筆によって、時と場所を越えて今も生き続けている。

(聞き手・事務局)

メシアンと小澤征爾

～アッシジの聖フランチェスコの
日本初演について



メシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉の日本初演は1986年3月12日、東京カテドラル聖マリア大聖堂で、小澤征爾さん＝写真（1987年読売新聞社撮影）＝指揮の新日本フィルハーモニー交響楽団、晋友会合唱団によって行われた。演奏は、小澤さんと作曲家が事前に話し合い、全8景から第3、7、8景を抜粋し、休憩時間を入れて2時間超のオラトリオ形式に仕立てたもの。歌手は、聖フランチェスコ役の勝部太、天使役の伊藤淑ほかの日本人キャストだった。

小澤さんとメシアンの関係は長く深い。1962年7月4日、NHK交響楽団を指揮しての〈トゥーランガリラ交響曲〉日本初演は、戦後音楽史上の快挙だった。「おそらく数年前だったら、誰もがこんな快挙を考えてもみなかったろう」（音楽評論家・秋山邦晴の読売新聞音楽評）。自ら指揮者を指名して来日したメシアンは、小澤さんの情熱的でダイナミックな指揮を絶賛。およそ20年を経て、^{ひっせい}畢生の大作〈アッシジ〉のタク

トを再び小澤さんに委ねた。

〈アッシジ〉は1983年11月28日、パリ・オペラ座で世界初演され、このときも小澤さんが指揮したが、それは難産の賜物だった。初演は2度延期され、本番は大成功。その「驚異的な指揮」（ル・モンド紙）は、欧州音楽界のトップニュースを飾った。

日本初演もまた、歴史に新たなページを開いた。「聴衆の熱狂はすさまじく、現代音楽としては空前の大成功がもたらされた。全力投球で未聞の名演奏を聴かせた指揮者の功績を心から称したい」（作曲家・諸井誠の読売新聞音楽評）。

それから30年余。ついに実現する〈アッシジ〉全曲日本初演について、小澤さんがコメントを寄せてくださった。「自分が敬愛する作曲家メシアン先生が唯一作曲したオペラの指揮を私に任せてくれたことを今でも懐かしく思い出します。今回、日本で全曲が演奏されると聞いて、とても嬉しいです」（文責・事務局）

心に残るクラシック

岸田 繁 ———④〈最終回〉

Shigeru Kishida

アーノンクルのベートーヴェン

ベートーヴェン：交響曲第9番〈合唱付き〉



バッハやモーツァルトならまだしも、ベートーヴェンに関して語られていることの多さたるや、ともすればベートルズやマイケル・ジャクソンよりも多角的な評価と、学術的研究の幅があるのではないかと思うほどである。最後の交響曲〈第九〉や、その後の彼の創作の集大成とも言える弦楽四重奏曲作品が持つエネルギーと情報量を「作家性」と言い換えるならば、後世への影響に鑑みるに、途轍もないモンスター作品群を作り上げた大作曲家であることは、今更言うまでもないだろう。今なお名作〈第九〉について語りたくなるのは、あの長大な楽想の中に数多の「感情の渦」や現代に通ずる「社会性」、つまりメッセージが溢れ、音楽を作り上げることへの喜びに溢れているからだ。当時「型破り」と評された、緩徐楽章を三つ目に配置する全体構成や、合唱や独唱の大胆な導入、特に第2楽章におけるティンパニの派

手な使い方など、斬新極まりなかったであろう音楽的要素の「冒険」は、当時の様々な音楽、芸術だけではなく、人々の心の中にあつたであろう「祈り」や「希望」を大きく揺るがすものであったと推測する。

音楽や詩は、時や場の移ろいによって大きくその意味を変えることがある。作曲家や詩人は時にシャーマン、あるいは占い師のように時代の行き先を案内し、随分と時を経てゆっくりと理解されてゆくような作品を作り上げる。長い作品、深い作品であればあるほど、濃縮果汁のように作り手の人生や、容易に説明できない感情、生まれたての赤子のような先天的で野性的な感覚を内包している。〈第九〉の後に書かれた弦楽四重奏曲作品は、ベートーヴェンの本質へと辿り着いた最終地点である。

今なお伝統的音楽ではなくポピュラー音楽として人々の心を刷新し続ける〈第九〉は、記録されている数多の音

楽作品の中でも最も濃厚で、多くの人々の心を動かし続けている。散らばったモチーフを作り上げようとし、失敗し絶望し、思い出し、再び光が見え、合唱し、今まで見えなかったものが見えるようになった……なんとリアルな芸術作品だろうか。

私は個性的な指揮者として数奇な人生を辿り、不思議な魅力と頑固な哲学を持っていたニコラウス・アーノンクルによるこの作品の解釈と演奏に心を打たれた。ベートーヴェンと同じくドイツに生まれ、ウィーンで活躍したアーノンクルはプレイヤー出身（チェロ）の指揮者でありながら、現代に通ずる古楽ブームやその奏法、演奏のあり方まで多くの功績を残した素晴らしいアーティストであり、哲学者でもあった。彼は自身の著書にて述べている。「音楽とはそもそも、人々の祈りと強く密接したものの（宗教観）であったが、産業革命後にその役割を大きく変えてしまった」と。

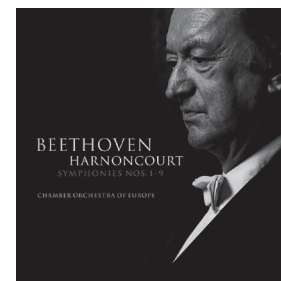
つまりは、人々の祈りや希望という内なるものが、新しい冷蔵庫や自動車、つまり即物的な「幸せ」に取って代わられてしまった、というふうに解釈している。私は冷蔵庫や自動車のある暮らしをしているし、熱心な宗教観があるわけでもないの、アーノンクルの言う「祈り」の本質を理解することはできない。しかし、一度彼と彼の古楽器オーケストラが演奏するモーツァ

ルトの〈アイネ・クライネ・ナハトムジーク〉を聴いた時に、知っていたはずの明朗な楽曲が、たいへ

んに不安な、畏怖すら感じるものになっていたことを覚えている。彼なら「古典の時代の演奏法と読譜法、作曲家が記す当時の意図を出来る限りスタイルに則^{のつ}って演奏したまで」と言うかもしれない。確かに、古楽器オーケストラ然とした演奏だった、としてもだ。

ウィーン古典派からロマン派への橋渡し、と言ってしまうとあまりに教科書然としているので、敢えて狭小なアウトプットから世界音楽への橋渡し、と呼ばせていただきたいベートーヴェンの〈第九〉。古楽からバルトークまで、独自の解釈で深みのある音楽を作り出すアーノンクルとヨーロッパ室内管は、少しばかり小ざっぱりとした演奏だが、気品のある時間の使い方と弓使い、大切に使い込まれた絨毯^{じゅうたん}のような木管楽器のアンサンブルが、ベートーヴェンの大胆な音使いに対して馬車でお供するかのよう、優雅で美しい世界観を醸^{かも}し出している。

◆次号からは恩田陸さんです。



アーノンクル指揮／ヨーロッパ室内管 ベートーヴェン交響曲全集
商品番号：0927497682
(Warner Classics 輸入盤)

◎打楽器奏者

西久保友広

Tomohiro Nishikubo

メシアン作品の集大成
純粋に楽曲の美しさを感じて

「11月は、いよいよメシアンの歌劇『アッシジの聖フランチェスコ』公演本番です。意気込みと打楽器の聴きどころを教えてください」

今までカンブルランさんと多くのメシアン作品を演奏してきましたが、その「集大成」的な意味合いが強く、大変楽しみにしています。いわゆる「現代音楽」は難解なイメージがありますが、身構えることなく、純粋に楽曲の美しさを感じてほしいです。特に、打楽器のみのアンサンブルから始まる珍しい作品。私は鍵盤打楽器シロフォンを担当しており、主に鳥の声を表しています。「鳥の声」はメシアン作品のシンボルで、主にシロフォン、シロリンバ、マリンバの鍵盤打楽器群が同じリズムを異なる音程で奏でます。そのアンサンブルの妙に期待してください。

「総勢約240人という特殊な巨大編成で、打楽器も約40種類といわれています。演奏会が続く中での準備も大

変だったのでは」

打楽器は10人が担います。うち8人がエキストラで、今まで一緒に演奏したことのある音楽家に、去年から声をかけ始め、素晴らしいメンバーが揃ったと自負しています。めったに聴くことのない特殊楽器も面白く、野本洋介さんが担当する「エオリフォン」（ウィンドマシーン）は、この演奏会のための特注楽器。打楽器のパート譜は普段のオーケストラ作品よりも相当分厚く、ひとり8冊にもなるんですよ。譜面台に乗るのが心配です（笑）。

「東京・府中生まれ。東京音楽大学、同大学院を経て、2009年、読響に入団。KOBE国際学生音楽コンクール・最優秀賞（第1位）や日本管打楽器コンクール・第2位など受賞歴も多い」

私の通った小学校が鼓笛隊が盛んで、6年生は全員参加するのですが、そこで打楽器を始めたのがきっかけです。中学・高校と吹奏楽部に所属。専門的に教えてくれる先生もおらず、独学で好き勝手にやって楽しんできたのが、かえって良かったのかもしれません。高3の秋の定期演奏会が思いのほか満足のいくもので、打楽器をちゃんと勉強したいと思い、司法書士の兄の



影響で法学部に進学希望でしたが、急きょ進路を大転換。一浪して東京音大に進みました。浪人時代は、打楽器の演奏会を探して関東近県を回り、初めて聴きに行ったオーケストラが読響でした。卒業後フリーランスでオーケストラ奏者をやっていくうちに、「大人数で音楽を作り上げていくこと」に魅力を感じるようになり、読響に入団。年数を重ね、最近やっと周りを見る余裕が出てきたかなと思います。「クラシックや自分の将来について感じることはありますか。また、夢を聞かせてください」

レパートリーを拡大していくことが必要だと思います。名曲も良いのです

が、まだ知られていない曲の魅力を伝え、今回演奏するメシアンなどの現代曲との垣根が低くなっていくといいなと思っています。オーケストラの活動に加え、室内楽とソロ、そして後進の育成が今の目標です。リサイタルは2年に1度重ね、今年で3回目。自分の宣伝とはなりますが、11月17日にマリンバ・リサイタルを開催します。

現在、三つの大学で約20人の学生に打楽器を教えています。その中で感じるのは、若い人は情報過多。ネットの情報だけではなく、自分の足で演奏会などに行ってほしい。また、失敗を恐れ正解だけを求めるため、角のない優等生が多く、出っ張った人が少ない。敢えて手とり足とりは教えずヒントだけを与え、自分自身で考えさせるよう「放任主義」を貫いています。

「最後に、打楽器は特に緊張を強いられるパートだと思います。ほぐす方法があったらぜひ教えてください」

打楽器は音楽の流れを一発で崩しかねない。他のパートに比べると出番は少ないですが、いわゆる「お休み」のところは決して休んでいるわけではなく、アンテナをしっかりと張り音楽の流れを汲み取ります。もちろん緊張はしますが、その緊張も「楽しみのひとつ」というようにしています。それと、甘党なので本番前に必ずモンブランなどの甘いものを食べることですね（笑）。

小森谷巧ら精鋭が繰り広げる渾身のアンサンブル

12/4 (月) 19:30 第16回 読響アンサンブル・シリーズ 完売
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《小森谷巧率いる精鋭の豊潤なブラームス》

ブラームス：スケルツォ (F. A. E. ソナタ)、ピアノ三重奏曲 第2番
弦楽六重奏曲 第2番

ヴァイオリン：小森谷巧 (コンサートマスター)、小杉芳之 ヴィオラ：柳瀬省太 (ソロ・ヴィオラ)、
森口恭子 チェロ：遠藤真理 (ソロ・チェロ)、渡部玄一 ピアノ：須関裕子 (客演)



小森谷巧

マイスターのタクトが描く壮大なマーラーの宇宙

12/12 (火) 19:00 第573回 定期演奏会 完売
サントリーホール

マーラー：交響曲 第3番

指揮：コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者)

メゾ・ソプラノ：藤村実穂子 女声合唱：新国立劇場合唱団

合唱指揮：三澤洋史 児童合唱：TOKYO FM 少年合唱団、フレーベル少年合唱団



コルネリウス・マイスター

名匠クリヴィヌが〈第九〉を指揮。年末に響く“歓喜の歌”

12/17 (日) 14:00 第202回 日曜マチネ・シリーズ 完売
東京芸術劇場コンサートホール

12/19 (火) 19:00 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール

12/20 (水) 19:00 第607回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/21 (木) 19:00 第18回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)

12/23 (土) 14:00 第202回 土曜マチネ・シリーズ 完売
東京芸術劇場コンサートホール

12/24 (日) 14:00 第99回 みなとみらいホリデー・シリーズ 完売
横浜みなとみらいホール



エマニュエル・クリヴィヌ



インガー・ダム=イエンセン

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

指揮：エマニュエル・クリヴィヌ

ソプラノ：インガー・ダム=イエンセン

メゾ・ソプラノ：清水華澄

テノール：ドミニク・ヴォルティヒ

バス：妻屋秀和

合唱：新国立劇場合唱団 合唱指揮：三澤洋史



清水華澄



ドミニク・ヴォルティヒ



妻屋秀和

12月 後半公演の聴きどころ

12日の《定期演奏会》は、首席客演指揮者のマイスターがマーラーの交響曲第3番を振る。ザルツブルクにほど近いアッター湖畔の作曲小屋で書かれ、一帯の雄大な自然を映し出した演奏時間約100分という大作で、管弦楽と声楽合わせて200人以上の大編成が奏でる。マイスターは渾身のタクトでダイナミックに描き切るだろう。メゾ・ソプラノ独唱には、ウィーン国立歌劇場、ハンプルク国立歌劇場など世界で活躍する藤村実穂子を迎える。

17日～24日には、年末恒例のベートーヴェン〈第九〉公演を、計6回、開催する。今年はフランスを代表する指揮者クリヴィヌが14年振りに読響に客演する。ベルリン・フィルやロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン・フィルなどを振り、2017-2018 シーズンからフランス国立管の音楽監督に就任した名匠だ。近年は古楽器奏法を取り入れるなど新たな解釈の試みで高く評価されており、おなじみの名曲〈第九〉をどう料理するか期待が高まる。

声楽陣には世界で活躍する実力派が揃う。ソプラノはニューヨーク・フィルやベルリン・ドイツ響など世界の一流楽団と共演するデンマークの歌姫ダム=イエンセン。メゾ・ソプラノは圧倒的な歌唱力を聴かせてくれる清水華澄が昨年に続き登場する。テノールはミラノ・スカラ座やドレスデン国立歌劇場などで活躍するドイツ人のヴォルティヒ、バスはドイツで実績を積み、堂々たる風格と深みのある美声が特徴の妻屋秀和が務める。合唱には日本最高峰のプロ団体である新国立劇場合唱団を迎え、“歓喜の歌”を高らかにお届けする。

《読響アンサンブル・シリーズ》は4日の開催で、当団コンサートマスターの小森谷巧らが登場する。オール・ブラームス・プログラムで、9月に続き弦楽六重奏曲から第2番を演奏するほか、前半では気鋭のピアニスト須関裕子とともにデュオとピアノ三重奏曲を披露する。豊潤な味わいと深みのあるブラームスの陰影をご堪能いただきたい。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

楽しい! カンブルランが贈る《ニューイヤー・コンサート》

1/6 (土) 14:00 第203回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

1/7 (日) 14:00 第203回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

J. シュトラウスⅡ: 喜歌劇〈こうもり〉序曲、ワルツ〈南国のパラ〉
ラヴェル: 亡き王女のためのパヴァーヌ
ヴィエニャフスキ: 華麗なるポロネーズ 第1番
デュカス: 交響詩〈魔法使いの弟子〉
オッフェンバック: 喜歌劇〈天国と地獄〉序曲
サン＝サーンス: 歌劇〈サムソンとデリラ〉から“バックナール”
ワグスマン: カルメン幻想曲
J. シュトラウスⅡ: トリッチ・トラッチ・ポルカ、ポルカ〈雷鳴と電光〉
ワルツ〈美しく青きドナウ〉

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

ヴァイオリン: 三浦文彰



シルヴァン・カンブルラン



三浦文彰

“色彩の魔術師”が独自の解釈で描きあげるブルックナー

1/13 (土) 18:00 第574回 定期演奏会
サントリーホール

ブリテン: 歌劇〈ピーター・グライムズ〉から“4つの海の間奏曲”
ヴィトマン: クラリネット協奏曲〈エコー＝フラグメンテ〉(日本初演)
ブルックナー: 交響曲 第6番

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

クラリネット: イェルク・ヴィトマン



イェルク・ヴィトマン

カンブルランが「ドイツ3大B」を指揮&名手ファウストと共演

1/19 (金) 19:00 第608回 名曲シリーズ
サントリーホール

1/20 (土) 15:00 第7回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

1/21 (日) 14:00 第100回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ブラームス: ヴァイオリン協奏曲
バッハ (マーラー編): 管弦楽組曲から
ベートーヴェン: 交響曲 第5番〈運命〉

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

ヴァイオリン: イザベル・ファウスト



イザベル・ファウスト

上岡敏之と木管メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル

2/6 (火) 19:30 第17回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※18:50から解説

《上岡敏之と読響木管メンバーによる室内楽》

ベートーヴェン: セレナーデ (Fl & Pf)

ルーセル: ディヴェルティスマン (六重奏)

プーランク: ピアノと木管のための六重奏曲 ほか

ピアノ: 上岡敏之 フルート: 倉田 優 (首席) オーボエ: 北村貴子

クラリネット: 金子 平 (首席) ファゴット: 井上俊次 (首席) ホルン: 日橋辰朗 (首席)



上岡敏之

ロシアの巨匠テミルカーノフが振る《極上のロシア音楽》

2/10 (土) 14:00 第204回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/11 (日) 14:00 第204回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/12 (月) 14:00 第101回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

チャイコフスキー: ピアノ協奏曲 第1番 ラフマニノフ: 交響曲 第2番

指揮: ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ピアノ: ニコライ・ルガンスキー



ユーリ・テミルカーノフ

練達の指揮が〈ローマの松〉で輝かしく壮大な響きを生む!

2/16 (金) 19:00 第575回 定期演奏会
サントリーホール

チャイコフスキー: 幻想曲〈フランチェスカ・ダ・リミニ〉

ラフマニノフ: パガニーニの主題による狂詩曲

ラヴェル: 組曲〈クーランの墓〉 レスピーギ: 交響詩〈ローマの松〉

指揮: ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ピアノ: ニコライ・ルガンスキー

※ 一部曲目が当初予定から変更されました。



ニコライ・ルガンスキー

巨匠の至芸が心に響く テミルカーノフの〈新世界〉

2/20 (火) 19:00 第609回 名曲シリーズ
サントリーホール

2/21 (水) 19:00 第19回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)

2/22 (木) 19:00 名曲シリーズ 福岡公演
アクロス福岡シンフォニーホール

グリムカ: 歌劇〈ルスランとリユドミラ〉序曲

プロコフィエフ: ヴァイオリン協奏曲 第2番

ドヴォルザーク: 交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮: ユーリ・テミルカーノフ (名誉指揮者) ヴァイオリン: レティシア・モレノ



レティシア・モレノ

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター
(10:00~18:00/年中無休) 0570-00-4390
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

ヨミキョー

南葵音楽文庫寄託記念
～読売日本交響楽団 和歌山特別公演～

■ 12/6 (水) 19:00 和歌山県民文化会館 大ホール

指揮：川瀬賢太郎 ピアノ：仲道郁代

ネイラー：序曲〈徳川頼貞〉

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第26番〈戴冠式〉

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

[料金] S ¥3,000 A ¥2,000

[お問い合わせ] 和歌山県民文化会館 073-436-1331

Sony Music Foundation 東日本大震災 復興支援プロジェクト
仙台フィル×読響〈第九〉チャリティ・コンサート

■ 12/27 (水) 18:30 東京オペラシティ コンサートホール

指揮・おはなし：山田和樹

ソプラノ：澤江衣里 メゾ・ソプラノ：鳥木弥生

テノール：藤田卓也 バリトン：小森輝彦

合唱：東京混声合唱団、武蔵野音楽大学合唱団

共演(合同演奏)：仙台フィルハーモニー管弦楽団

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

[料金] 小・中・高校生 S ¥3,000 A ¥1,500

保護者 S ¥5,000 A ¥3,000

大人のみ S ¥4,500 (3階席のみ)

[お問い合わせ] 東京オペラシティチケットセンター 03-5353-9999

NISSAY OPERA 2017 オペラ〈ルサルカ〉 静岡公演

■ 1/27 (土) 14:00 静岡市民文化会館 大ホール

指揮：山田和樹

演出：宮城聡

出演：竹多倫子、大槻孝志、妻屋秀和、与田朝子 ほか

ドヴォルザーク：歌劇〈ルサルカ〉(全3幕・チェコ語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000

[お問い合わせ] 静岡市民文化会館 054-251-3751

CD information 読響CD案内

「スロヴァチエフスキ&読響／未発表ライブ・レコーディング」が発売

今年2月に惜しまれつつ逝去した巨匠スロヴァチエフスキ&読響の未発表ライブ・レコーディングのCDが、10月18日にDENONレーベルから3タイトル一挙に発売されました。超高音質が話題のUHQCDによる臨場感あふれるサウンドでお楽しみください。



シューマン／交響曲全集

(2007年、08年、10年／サントリーホール他におけるライブ録音)

発売元：日本コロムビア株式会社

品番：COCQ-85381、85382

価格：4,200円(税別)

質実剛健なスタイルを基調にドイツ正統の豊かな旋律が歌われていく、スロヴァチエフスキならではの名演です。



ショスタコーヴィチ／交響曲第10番&第11番

(2007年、09年／サントリーホールにおけるライブ録音)

発売元：日本コロムビア株式会社

品番：COCQ-85383、85384

価格：4,200円(税別)

ドイツ音楽とともにスロヴァチエフスキの重要なレパートリーであったショスタコーヴィチ。闘達で生命力あふれる指揮により、凄まじい迫力の演奏を繰り広げています。



ブルックナー／交響曲第5番

(2008年／サントリーホールにおけるライブ録音)

発売元：日本コロムビア株式会社

品番：COCQ-85385

価格：2,800円(税別)

マエストロが十八番としたブルックナーから、名演として記憶に残る第5番をCD化しました。ブルックナーに求められるあらゆる魅力を湛えた圧倒的な名演、偉大な遺産です。

読響が2018-19シーズンに取り上げる演目が決まりました。任期の最後を迎える常任指揮者シルヴァン・カンブルランを軸に、力の入ったプログラムをお届けします。今回は、長期改修工事が完了したサントリーホールで開く定期演奏会と名曲シリーズの聴きどころをご紹介します。

定期演奏会



シルヴァン・カンブルラン

読響の第9代常任指揮者、カンブルランは2010年4月の就任以来、楽団の実力を引き上げるとともに、フランスものや現代音楽、オペラで読響に新風を吹き込みました。3期9年間のラスト・シーズンでは、それらの集大成にふさわしい演目を揃えました。

読響の看板でもある《定期演奏会》には3回登場し、ずしりと手応えのあるプログラムに取り組みます。4月は、マーラーが完成させた最後の交響曲である第9番がメイン。カンブルランらしく、現代から作品を照射したモダンな解釈が冴えるでしょう。

9月はラヴェル〈ラ・ヴァルス〉に独自の読みを施して、「死と破滅」というテーマ性を色濃く打ち出す一夜です。ペンデレツキ〈広島^さの犠牲者に捧げる哀歌〉で始まり、シマノフスキの



諏訪内晶子 ©吉田民人

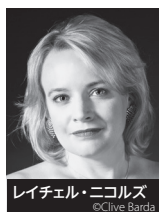
ヴァイオリン協奏曲第1番では諏訪内晶子が独奏に登場します。

任期ラストの19年3月は、シェーンベルクの〈グレの歌〉に挑みます。カンブルランは着任時にシェーンベルク作品でスタートしており、同じ作曲家の大作で有終の美を飾ります。レイチェル・ニコルズ(ソプラノ)、クラウディア・マーンケ(メゾ・ソプラノ)、ロバート・ディーン・スミス(テノール)など歌手陣も豪華。前2者は15年の〈トリスタンとイゾルデ〉公演でも好評を博しました。

このシーズンから二人体制となる首席客演指揮者も、凝ったプログラムを用意します。コルネリウス・マイスターは6月にR.シュトラウス・プロに挑戦。交響詩〈ドン・キホーテ〉では石坂

ヴァイオリン協奏曲第1番では諏訪内晶子が独奏に登場します。

このシーズンから二人体制となる首席客演指揮者も、凝ったプログラムを用意します。コルネリウス・マイスターは6月にR.シュトラウス・プロに挑戦。交響詩〈ドン・キホーテ〉では石坂



レイチェル・ニコルズ ©Clive Barta



クラウディア・マーンケ ©Monika Rittershaus



コルネリウス・マイスター ©読響



石坂 団十郎



山田和樹 ©Marco Borggreve



小菅 優 ©Marco Borggreve



小林研一郎 ©読響



エリソン・ヴィルサーゼ ©Kinshima

団十郎(チェロ)と読響ソロ・ヴィオラの柳瀬省太が独奏を務めます。後半は歌劇〈カプリッチョ〉と〈影のない女〉から名場面をドラマティックに聴かせます。

山田和樹は、ご本人いわく「日本の秀作と〈法悦〉プロ」をお送りします(19年1月)。演奏機会が少ない諸井三郎の作品、現代の人気作曲家・藤倉大に共同委嘱したピアノ協奏曲第3番の日本初演(独奏=小菅優)に、ワーグナーとスクリャービンという盛り沢山なメニューです。

特別客演指揮者の小林研一郎は、得意のチャイコフスキーから〈 Manfred 交響曲〉を取り上げます(7月)。ベートーヴェンのピアノ協奏曲第1番では、円熟を深めるロシアのエリソン・ヴィルサーゼが滑らかな独奏を響かせます。

ゲスト出演する指揮者の顔ぶれは多彩。米国の指揮者・作曲家バーンスタインの生誕100年を祝い、その交響曲第2番〈不安の時代〉を振るのは、イ

スラエル出身で読響初登場となる鬼才、イラン・ヴォルコフです。共演するピアニストは、フレッシュな河村尚子。バッハなどの古楽器演奏で知られる鈴木雅明は、久々に読響へ客演。ドイツの高名なRIAS室内合唱団らと共に、メンデルスゾーンの合唱作品などを取り上げます(10月)。

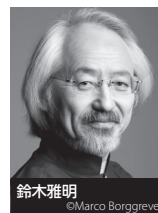
米国の名匠デニス・ラッセル・デイヴィスは11月に、読響と縁が深かったスロヴァチエフスキ(17年2月逝去)の〈ミュージック・アット・ナイト〉を、故人へのオマージュとします。モーツァルト〈フルートとハープのための協奏曲〉ではベルリン・フィルの首席奏者、エマニュエル・パユにマリー=ピエール・ラングラメと豪華な独奏者が並びます。ドイツのベテラン、ローター・ツァグロゼクはブルックナーの交響曲第7番で本場仕込みの滋味を引き出します(19年2月)。



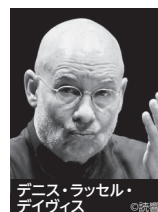
イラン・ヴォルコフ ©James Morrison



河村尚子 ©Hirofumi Isaka



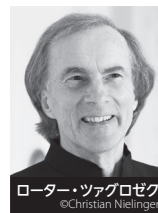
鈴木雅明 ©Marco Borggreve



デニス・ラッセル・デイヴィス ©読響



エマニュエル・パユ ©Robert Fischer/ licensed to BMJ Classics



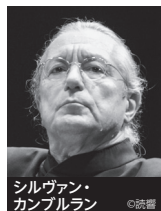
ローター・ツァグロゼク ©Christian Niesinger



名曲シリーズ



親しみやすい傑作をサントリーホールで楽しめる《名曲シリーズ》も、聴きものぞろいです。常任指揮者カン



シルヴァン・カンブルラン ©読響

ブルランはこのシリーズ

にも3回登場し、過去の演奏曲の再演を含め、任期の締めくくりに臨みます。4月は春

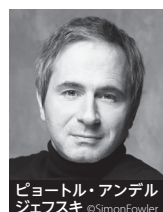


ポール・メイエ ©Shin Yamagishi

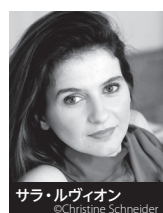
らしく、ストラヴィンスキー〈春の祭典〉を中心に幕開け。クラリネットの

ポール・メイエを迎えたモーツァルト〈クラリネット協奏曲〉とド

ビュッシー〈クラリネットと管弦楽のための第1狂詩曲〉では、フランス人同士の



ピョートル・アンデルジェフスキ ©Simon Fowler



サラ・ルヴィオン ©Christine Schneider

9月はブルックナーの人気作、交響曲第4番〈ロマンティック〉を核にしたドイツ系プログラム。前半では、進

境著しいピョートル・アンデルジェフスキと、モーツァルトのピアノ協奏曲第24番を聴かせます。最後の

19年3月は、カンブルラン得意のオール・フランス・プロです。イベールの〈寄港地〉にフルート協奏曲(独奏

=サラ・ルヴィオン)、ドビュッシーの〈前奏曲集〉(ツェンダー編)に〈海〉と、^{かぐわ}香しいエスプリが横溢する夕べ^{おういつ}になります。

二人体制となる首席客演指揮者も、それぞれ注目度抜群の演目で実力をア

ピールします。コルネリウス・マイスターは6月にマーラーの交響曲第2番〈復活〉を披露。



コルネリウス・マイスター ©読響

声楽が入るマーラー作品では、この12月に演奏する第3番に続く、大作へのチャレンジとなります。ソプラノの



ニコール・カベル ©Devon Cass

ニコール・カベルらを独唱に招き、国内随一の呼び声が高い新国立劇場合唱団が底力を見せます。

山田和樹の回(19年1月)は、色彩感豊かなラテン系の作品で固めます。冒頭にいきなりサン=サーンスの交



山田和樹 ©読響

響曲第3番〈オルガン付き〉を置き、ラロのチェロ協奏曲(独奏=ニコラ・アルトシュテ



ニコラ・アルトシュテット ©Marco Borggreve

ット)を挟んでレスピーギの交響詩〈ローマの祭り〉と、オーケストラが壮大な熱量を発する曲目を

前後に配します。山田ならではのダイナミックなリードが映える選曲です。



小林研一郎 ©読響



牛田智大 ©Kunio Onishi

特別客演指揮者の小林研一郎は、CDも好評なブラームスの交響曲第2番を主軸にした組み合わせを振ります(19年2月)。前半には

伸び盛りの若き才能、牛田智大をソリストに迎え、チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を熱っぽく仕上げます。

ゲストとして読響の指揮台に立つ4人は、いずれも読響初登場で、個性派ばかりです。フィンランド出身の実力派ヨーン・ストルゴーズは、お国物の



ヨーン・ストルゴーズ ©Marco Borggreve



小山実稚恵 ©Wataru Nishida



ジョヴァンニ・アントニーニ ©David Ellis WEB

シベリウスから親しみやすい交響曲第2番で本領を発揮します。前半ではショパンのピアノ協奏曲第1番を国内屈指の人気ピアニスト、小山実稚恵と華麗に紡ぎます(8月)。10月に来演するイタリアのジョヴァンニ・アントニーニは古楽界のホープ。先鋭な解釈で注目を浴びています。最大の話題は世界的なヴァイオリニスト、ヴィ

クトリア・ムローヴァと組むベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲です。両者は欧州で一緒にの舞台を何度も経験しており、日本でも待望の顔合わせが実現します。



ヴィクトリア・ムローヴァ ©Henry Fair

年末恒例のベートーヴェン〈第九〉公演に登場するのは、やはりイタリア出身の中堅指揮者で、ドイツ系作品の手堅い解釈でも定評



マッシモ・ザネッティ ©Hyperactive Studio

あるマッシモ・ザネッティ(12月)。欧米で活躍する歌姫、アガ・ミコライ(ソプラノ)



アガ・ミコライ ©Wernicke

ら充実した独唱陣と新国立劇場合唱団が“歓喜の歌”を盛り上げます。

イタリアの新鋭ヤデル・ピニャミーニが振る5月の回にもご注目ください。名門ウィーン・フィルの女性コンサートマスターでもあるアルベナ・ダナイロ



ヤデル・ピニャミーニ ©norarottberg

ヴァをソリストに、グラスノフのヴァイオリン協奏曲をロシア情



アルベナ・ダナイロヴァ ©Julia Wesely

緒豊かに奏でます。メインのチャイコフスキー〈悲愴〉はイタリアらしい歌心にあふれた快演になるでしょう。